

リベルテール

五 月 号

主権在民、これが民主主義の基本で、このお
れたちが主権者だという。ウソだ。主権とは
最高、独立、絶対の権力で統治権だと辞書は
いう。おれたちにはそんなものはない。おれ
たちの上に警察権、軍隊をもった国家という
暴力組織があり、代議政治の名で投票による
合理化で法律をつくり人民をしほす。おれは
自主の存在者、有為転変の無常の人生を誠行
錯誤しつつ貧しく生きる人間だ。主権者さん
をじやない。クソクラへ民主主義。狂蛙居士

Libertaire VoL, V, No 6

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十九年五月 一五日発行第五十三号

リベルテール 定価一〇〇円(送料共)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

1974年5月15日発行 Vo, V No 6

編集兼発行者 三 浦 精 一

発 行 所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)

目次

選挙で救われるか	杉藤二郎	1
高田・過渡期論批判	藤本	2
続スペイン革命の可能性	清水清一	4
パトスの神話	小田光雄	8
雑報		21

前回の表紙のことばはあやまりです。

選挙で救われるか

杉藤 二郎

『働く者の生活を守る為に日本共産党の躍進を』という大見出しのビラが、各戸のポストに投げ込まれた。内容は勿論選挙運動だ。

曰く、『二十年間、私たちの生活を苦しめ続けてきた自民党を、日本の政治から大きく後退させねばならないと思います。』

地域の皆さん!! 物価は、この五年間に平均三割五分上っています。三割五分といえば、三万円の賃金に対する一万五百円です。少しぐらいの賃金値上げで、とうてい追いつける数字ではありません……と書き出して、根本的にこれを改革する日本共産党の物価値上げ対策は、『米や野菜など農産物の二重価格制度をとり、農民からは高く買い、消費者には安く売る。また公共料金を上げず、公共企業に必要な経費や農産物の二重価格による赤字は、国の財政でうめる。その財源的裏付けは、独占資本に対する大増税、大金持への高加税、高速道路や工業用地をつくる費用、自衛隊、武装警官の為の費用の削減、等々で二兆三千億円程度出てくる。』

だから、自民党支持をやめて共産党へ、と言うことら

しい。

以上の記事は、数字のところを見てもらえばわかるように、数年前書いたものだが又もや選挙を目前にひかえてみると今日でもそのまゝ通用するように思う。

こんなビラは、ひとり共産党だけでなく、社会党も民社党も、また公明党も、大同小異、それぞれの唄い文句で各戸へ配る。

自民党は自民党で、悪名轟かした黒い霧の煙幕を張って庶民をごまかし、選挙戦にのぞむ。これら政治屋どもに呼応して、官庁は、莫大な金をかけ「棄権」は国民の恥だなどと人民を投票へとかりたてる。

さて、このようにして選ばれた議員とか言う者が、ほんとうに我々人民の為に働いてくれるだろうか? 否と答えざるを得ない。如何に立派な公約を掲げた議員でも、いざ当選してしまつと、大衆の要望は知らぬ顔で、尻喰え観音を決めこむ。それが政治屋であり、現在の政治機構というものである。政治屋には、ヒューマニズムなんてものを期待できないのだ。

だから、我々は一票行使をやめるのだ。

どんなに、誰からせつかれても、一人一人が投票拒否をすることだ。それがやがて大衆を目覚めさせ、自由連合への足がかりを築いて行くのだ。

選挙には投票拒否を呼びかけよう。

高田・過渡期論批判

「リベルテール」三月号の高田氏の御意見に対して、若干の私の感想を述べたいと思います。批判の論点は

(1)世界革命戦争路線の批判の不十分性

(2)ブルジョア国家打倒後の社会のイメージのあいまいさ

の二点からです。

(1)について述べますと、まず第一に氏の「世界窮民コジキ革命」の語で表現されているものは、マルクスの資本主義の発展とブルジョアジーとプロレタリアの貧富とは相対的に反比例するという論に対する批判とありますが、マルクスの頃とちがって二〇世紀の日本・ヨーロッパ・アメリカの労働者の飢えないばかりでなく、かなり高水準の物質的享樂を受けていること、貧困が革命の本質ではない事など、マルクスの言ったのはまちがっているのではないかとのお考え——よくわかります。しかしながら、それだけでは余りにも表面的すぎるのではないのでしょうか。日本においても三百万部落民、六〇万在日朝鮮人、百万沖縄県民等々貧しい生活を余儀なくされている人々があり、又アジアに吹きあれている反日斗争を斗っている人々がどのような生活を強いられているか、

そして、韓日の若い女性が何故キーセン・パーティーで自らの肉体を日本人に提供しているのか、氏はこれらの事を御存知でありましょうか。それだけではありません。アジア・アフリカ・中南米には余りにも貧しく抑圧されている人がたくさんおり、それらの多くの人々が革命運動を担っております。これらをどうお考えなのでしょう。か。いずれにせよ、人が革命にかかわっていく経路には多様なものがありましょうが、マルクスの公式を否定して見ただけの「世界窮民コジキ革命」という言葉の中には、現実認識の甘さだけでなく何かしらこぼれ落ちる無数のものを感じざるを得ません。

第二に「ブルジョア国家の打倒が革命ではない」「ブルジョア国家の打倒が安易にリヴィエトやコミューンに結びつく」と考えるのは楽観的にすぎる」というむしろ常識的にすぎる程常識的な事を述べる事によって、多くの日本のアナキスト同様、明確に政治革命を提起する事をためらっているようですが、政治革命抜きにどんな社会革命や文化革命の進展があるとお考えなのでしょう。か。それとも政治革命だけは他のマルクス主義者（トロヤスタや毛など）にでもやらせて政治革命の動乱のさ中にアナキストだけは安全にソヴィエト作りやコミューン作りをやっていればいい、やっていられるとお考えなので

しょうか。

その事が同時に、世界革命戦争論がビビッドに持っていた問題意識、即ち現在の資本主義をいかにして根本的に変革するかという問題意識を意識的にか無意識的にか黙殺している姿勢に結びついているのです。もちろん、根本的変革は不用——歴史的に破産している——合法主義・改良主義で十分ブルジョア社会の止揚は可能であるというならば話は又別でありましょうが。（それならばそれで、第二インターあたりの総括でもおききたいと思いますが）

更に誤解と思いますが、世界革命論が世界政府の樹立で終る等、マルクス主義者も言った事も考えたこともないような事を平気で言っているのも一人よがりとは思いませんし、とりわけ、ブルジョア国家成立の歴史的かつ政治・経済分析抜きに批判は批判として全く成り立っておりません。

けだし、過渡期論という事を考えますに、私の意識の中では過渡期論の半分は本質的にいかにしてその過渡期的状態を作り出すかという問題でしめられるべきなのだという風に考えております。

(2)のブルジョア国家打倒後の社会のイメージは、今後詳しく述べるのでありますが、この批判文の限りでは

かなり水準的にも落ちていゝし、悪く言うところレーニン主義の二番せんじ以上の事を言っていないのではないのでしょうか。氏の提起しているものは、総体として、政治革命抜きの社会革命であり、階級の独裁を前衛党独裁へ歪曲したレーニンと同等水準としか思われないアナキストの独裁を主張し、「人民大衆に対する宗教的信仰を捨てよ」というおまけまでついているのです。レーニン主義には、その独裁をやり通すだけの一貫した思想性とその手段としての党が存在しましたが、それに反してその両方を欠落させるアナキストの独裁論は良くてレーニン主義の二番せんじ、悪く言えばナンセンスなボンチ絵以上のものではないでしょう。

それにしても、残存反革命分子の処理なんぞという言葉はくすぐったいではありませんか。処理とは銃殺であり、強制収容所へ送り込む事ではないのです、独裁は冷酷なゲバルトによって支えられるのです。それにしてもブルジョア国家が打倒されるまでは非暴力路線で、打倒後は暴力路線でというわけでもないのでしょうかから……：とにかくあいまいで、従来の論議のむしかえして、思惑するのです。

ほくは、きつと高田氏を非常に誤解しているのだと思

うのです。又誤解であつてくれたらという願望も秘かにこめて書いたつもりです。無政府共產主義論・国家論を期待しましょう。三月三十日 藤本

続スペイン革命の可能性

清水 清一

カミール・ベルネリは『ゲラ・ディ・グラッセ』（「階級斗争」一九三六・一〇・二四）紙でこう語った。

「ファシスト軍の作戦基地はモロッコにある。われわれは全国教徒の影響にあるあらゆる戦区に向かつて、モロッコの自治権のためのプロパガンダを強化すべきである。マドリッド政府にモロッコ領の放棄とモロッコの自治権保護を知らせる明確な宣言を行なわせるべきである。フランスは北アフリカやシリアでの反響や反乱の可能性に関心をもつて見守るだろうし、イギリスはパレスチナでのアラブ人の自治権と同様エジプトの自治権が強化されることに脅威を感じるだろう。回教徒世界に反乱を呼び起す政策を採用して、こうした恐怖を非常に多くひき起こすことが必要である。

そうした政策のために金が必要であり、煽動者と組織者をアラブ流民の中心地やフランス領モロッコの国境地帯に至急派遣せよ。」

再編され、その「鉄の規律」を持った正規軍「人民軍」はムーア部隊に破れた。ストーリーニスト共はスペインの「革命」に勝利したのだろうか。トロツキーが正に手品のように創りあげた赤軍は疑いもなく、「人民の軍隊」ではなくブルジョア国家の常備軍である。「人民の軍隊」とは武装した人民のことである。だが、トロツキーの軍隊はそうではない。トロツキーの赤軍は、銃を突きつけられ武装させられた人民である。トロツキーは革命を軍事に従属させてしまった。そしてトロツキーよりもバカなストーリーニンはこの誤りを最悪の形でスペインで再現させた。

レーニンは「帝政政府の敗北、ロシア革命の勝利」を「帝国主義戦争を内乱へ」として主張した。だが権力を握ったボルシェヴィキは正規軍の建設を理由としてさなる進撃を拒否し、ヴレスト・リトウスク条約によってウクライナを投げ捨てた。世界革命戦争は投げ捨てられずでストーリーニンの路線はしかれたのだ。だがこれに對してアナキスト及び左翼エスエルは「革命政府の敗北、世界革命の勝利」を「ロシア全土でパルチザン戦を」として主張した。当然にもこの叫びはボルシェヴィキによって血の中に窒息させられた。ともかく、ロシアでは革命を投げ捨てることによって軍事的勝利を手に入れる

この彼の指摘は全く正しい。サハラ・モロッコ人民と連帯することによって、さらに全アラブ社会の被抑圧民族・人民と連帯し、反ヨーロッパ帝国主義の叛乱を創出することによって、スペインの革命後大衆に対する独伊のファシスト及び英仏のブルジョアジーによる武力的・経済的包囲を逆包囲し、さらにストーリーニスト・ロシアをも撃つことができるのだ。さらにヨーロッパ帝国主義を直接包囲することによって、アジア・アフリカの植民地、被抑圧民族・人民への収奪の環を断ち、アジア・アフリカの反乱を創出しえただろう。もちろん、そのことによって日本をも撃つことができたのだが、つまり第二次世界大戦は単なる帝国主義戦争ではなく、正に世界革命戦争へと転化することができたのである。少なくともスペイン革命はその突破口となることができたのだ。

ドゥルティエとベルネリは革命か戦争かではなく、革命戦争の勝利か敗北かと正当にも主張した。スペイン大衆のとるべき道は唯一これだけだったのだ。しかも彼らは世界革命戦争へと突き進むことなしには決して勝利しえなかったのである。

人民は革命なしにつまり共產主義なしに戦争に勝利することはできないだろう。スペインにおいては人民の革命の軍隊＝民兵は解体され正規軍にブルジョア軍隊へと

ことができたのだが、スペインではどちらも手に入れることはできなかった。

革命か戦争か、ではなく革命戦争の勝利か敗北か、これしかないのである。そして革命戦争の勝利のためには革命の軍隊、革命された軍隊が必要であり、それは武装した大衆コミューンに他ならないのだ。マルクスふうに云って見よう。労働者はできないの軍隊を単にその手に握り、それを自身のために使うことはできない。労働者は自身の軍隊を造らなければならないが、それはトロツキーのやったようにできないの軍隊をまねたものであってはならないのだ。

ウクライナにおけるマフノのパルチザンはひとつにはその地方性の故に敗北した。（だが、この敗北はマフノ軍のみの責任ではない。それは全ロシア、さらにヨーロッパの日和見アナキストたちの責任でもある）だがベルネリは、少なくとも理論的には、その限界を超えたのだ。だからこそベルネリはスペインで革命が勝利しては困る——もちろん、ストーリーニン様にとわりもなく世界革命など、とんでもない——ストーリーニストの手で同じく革命が勝利しては困るCNT指導部の黙認の下に虐殺されたのである。革命的大衆の五月蜂起におびえた「指導者」共は急がねばならなかった。ストーリーニストはスペイン

革命の世界革命への突出の可能性を正しくとらえていた
のであり、だからこそ必死に革命を圧殺せんとしたのだ。
それに比べてCNT指導部は何とダメなことか。スター
リニストにとってこのような政治的未熟児であるCNT
指導部をやつること位、赤子の手をひねるようなもの
だったのだ。

「あなたがもし勝利した場合には一面の廢墟の上に
いることになる」という間にドゥルティはこう答えた。
「われわれはいつもスラムや壁穴での暮らしをしてきた。
われわれは一時的に環境に順応する仕方を知っている。
忘れてはならないよ、君。われわれは建設することだ
てでできるのだ。ここスペインやアメリカやその他どこ
でも、こうした宮殿や都市を建設したのはわれわれなのだ。
われわれ労働者はそれらにとってかわる別のものだって
建設することができると。しかももっと良いものをだ。わ
れわれは廢墟を少しも恐れはしない。われわれは大地を
引き断とうとしているのだ。このことについてはいさ
かの疑念もない。ブルジョアジイはもしかすると歴史の
舞台を去る前に、その世界を爆破し廢墟にするかもしれ
ない。われわれは自分たちのこの心の中に新しい世界を
担っている。その世界はこの瞬間にも大きくなろうとし
ているのだ。」

この主張は正しい。だが文明を破壊するその主体は文
明社会の人間だろうか。そうではない。「文明」を破壊
するのは「未開」の人々だ。文明社会の人間は「未開」
の人たちの斗いに依拠し、「文明」を破壊することによ
って、「文明人」としての自己を廢絶するのだ。「未開」
の原始共產制に生きる人々にこそ依拠しなければなら
ない。

これがドゥルティやベルネリの同時にスペインの革
命大衆の限界であった。

スペイン革命は、少なくとも最下層の民衆の斗いは明
らかに反文明的であった。例えばスペインの貧農は、そ
の素朴な千年王国の信仰——肉食や酒やコーヒータバ
コを断ったり、革命の勝利の暁には食物は火を通さなく
とも良くなると考えたり、男娼を「自然に反する」とい
う理由で銃殺したり、——を守った。彼らの斗いは確
かに原始共產主義的であった。この点で彼らは間違いなく
革命的である。だが、同時にそれが彼らの限界である。
文明社会の人間が、一方で「未開」の人間を抑圧しつつ
原始共產主義的な革命を目指したとしても、このように
どうしようもなく、マンガチックなものならざるを得
ないのだ。彼らスペインの下層大衆は、モロッコ・サハ
ラの辺境の植民地の原住民に、彼らの原始共產主義に依

拠しなければならなかった。

CNTの入閣は是か否か、このようなことはどうでも
よい問題である。辺境のアラブ人民に敵対したCNTは
徹底的に抑圧者となるしか、つまり入閣するしかなか
つたのである。CNT大臣はベルネリの主張に耳をかさな
かったが、CNTが入閣する以前、CNTのある指導者
は共和国政府にモロッコへの植民地支配を強化するよう
主張し、その要求が受け入れられなかったと、腹を立て
ていたのである。

植民地本国を撃つのは植民地人民である。そして現代
の文明——世界帝国主義を撃つのは辺境・原始共產制に生
きる人々である。

我々は単に植民地人民、国内下層人民と連帯するだけ
では不充分である。

我々は原始共產制に依拠しなければならぬ。

スペイン大衆は「スペイン革命の敗北、世界革命の勝
利」を叫ばねばならなかった。そして原始共產制へ退却
否、進撃しなければならなかったのである。

ブランコはバスク人民によって処刑された。そしてフ
ランコは………七四・一・一〇

リベルテール合本

☆リベルテール（一九七三年度）の合本ができました。
十二冊分で頒布価金一千元也。

黒旗の下に

☆既報の通り、文京区後楽二丁目七番五号二——二、啓
衆ビル4Fにて「黒旗の下に」の新版がでた。面目を一
新してオールドとヤングの対話が載せてある。定価五〇円

アナーキ

12

☆カーの「バクーニ」像をめぐって／南鮮小説ハ糞地を
めぐってV／兆民・秋水・クロボトキン／一革命家の告
白ハ私とは何か？Vブルードン他定価一五〇円東京・新
宿東大久保一の四六四、バルカン社気付 他に「らじか
る」9号 同地番イデア出版 乞連絡

安成二郎氏死去

「豊草原瑞穂の国に生まれきて、米が食えぬとはウソ
のような話」で知られる同氏は四月三〇日老衰により死
去された。往年の闘士ではある、八五才